

地域づくり
close-up

成恒子ども神楽愛好会

地域の伝統を子どもたちに継承し健全育成を図る

成恒子ども神楽愛好会は、子どもたちに地域の伝統芸能である成恒神楽を継承し、将来の担い手を育てるとともに、心豊かな大人に育つてもらいたいと願い、平成16年から活動しています。平成26年に地域づくり活動団体に認定され、更なる発展を目指しています。町内外の神社や老人介護施設、保育園など多くの場所で神楽を披露しながら、一人でも多くの人に成恒神楽を知つていただきたいと励んでいます。



舞えることにまず感謝を

上毛町成恒の吉富神社の境内に、月に3回、子どもたちの明るい声とお囃子の音が響きます。成恒子ども神楽愛好会の始まりは平成16年、当時4歳だった國村昇希君が、成恒神楽保存会代表の上川豊秋さんに、どうしても神楽を教えてほしいと言つて来たのがきっかけでした。あまりの熱心さに、神楽は一人では舞えませんので、子どものメンバーを募集したところ4名が集まりました。その後、メンバーの入れ替わりはあります、現在は高校生まで17名が練習に励んでいます。

成恒子ども神楽愛好会で一番大事にしていることは「礼儀作法」です。練習場所である吉富神社の前で、来た時と帰る時には必ず柏手を打ちます。神楽を舞いに行つた時は、ここへ呼んでくれたこと、神楽を舞わせてもらえることに対して心を込めて「ありがとうございます」を徹底しています。ただ舞うのではなく、昔からの祭りを継承している地域の皆さん、各地のお神様や自分の家族、神楽に携わるすべての人たちに感謝の気持ちを持ちながら練習に励み成長してもらいたい、また、自分一人の力ではなく、たくさん的人に支えられて神楽が舞えることを分かってほしいと思っています。

地域の皆さんに育てられ

メンバーは上毛町からだけではなく、近隣の市町から参加している子どもが多いことも特徴の一つです。築上町の茂呂田匠瑛君（小学5年生）は「お父さんが成恒神楽で舞っているのがカッコ良かったので僕も舞つてみたいと始めました。挨拶や礼儀はとても厳しいけど練習はとても楽しいです」、吉富町の猪ノ元悠人君（小学4年生）は「友だちが習つていて誘われました。まだ2年目だけど演目を覚えるのは大好きです。今は剣を練習しています」と笑顔で話していました。

練習では、教える大人も教わる子どもも真剣そのものですが、「人数が多いので何人かに分かれて練習しています。自分が歩き方など自分の動作と重ねて練習することが一番大事です。演目によって舞は変わってきます。誰が相手でも合わ

せて舞えるようにするためには、「にも二にも練習の積み重ねが必要です」と話す代表の今村康一さん。息子の優吾君（6歳）も3歳から神楽の練習を始め、今では「御先」「乱御先」「神迎」などの演目が舞えるようになりました。今度は「剣」に挑戦したいと目を輝かせています。早くみんなの前で舞えるようにならんばります」といきいきと答えてくれました。今年度の目標は、神楽の演目の中でもスケールの大きい「大蛇」を披露することです。特に大蛇の舞手は身体を胴の中に隠し、身体を見せずに舞わなければなりません。登場人物も多く、ストーリー性のある内容を舞うためにチームワークで挑戦しています。

年間を通して各種イベントや、各地区の秋祭りに参加するなど、多忙なスケジュールですが、どこに行つても子ども神楽は大人気です。子どもたちもまた、日頃から練習してきた成果を発揮するチャンスです。迫力の舞に思わず泣き出す赤ちゃん、福祉施設を訪問の際は涙を流して喜んでくれるお年寄りの方、熱心に写真を撮つてくれる方など、観客からいただく拍手やかけ声と共に、大きな自信につながっています。

神楽が好きなことがなにより大切

成恒子ども神楽愛好会も他の活動団体同様、メンバーが成長するにつれ、部活や進学などでなかなか練習に参加できないのが現状です。でも、一度覚えた舞やお囃子はしっかりと受け継がれています。毎年、大晦日に行われる年越し神楽には、そんなメンバーたちが集まっています。「久しぶりに舞の衣装に身を包み、お面をかぶり、嬉しそうに舞う姿は本当に神楽が好きでたまらないのが良く分かります。伝統芸能の継承などと言うと少し堅苦しいイメージですが、この子どもたちの姿も継承の一つではないかと思います」と話す保存会代表の上川さん。これからもいろんな場所で神楽を披露し、神楽のリズムや太鼓の音を肌で感じてもらい、舞う人も見る人も、もっとともと神楽のことが好きになつて欲しいと思います。

●問い合わせ先 成恒子ども神楽愛好会

080-5283-4015(今村)

